【パーキンソン病に使用される薬】

パーキンソン病は脳内の**「ドーパミン」**という物質が不足することで発症する病気です。

このドーパミンが減少すると脳内の指令がうまく伝達されなくなり、振戦（手のふるえ）、無動（動作が鈍い）、固縮（筋肉が固くなる）などの症状が現れます。パーキンソン病の治療は現在のところ、このような症状を軽くするための薬物療法が中心となります。

主な薬剤はその作用の仕方から大きく二つに分けられます。一つはドーパミンの働きを高めて効果を増すもので次のような薬があります。**①レボドパ（メネシット等）**はパーキンソン治療の代表的な薬物療法です。レボドパは、脳の中に入るとドパミンに変わり、減少したドーパミンを補います。**②塩酸アマンタジン（シンメトレル）**は少なくなっているドーパミンの分泌を促進し、神経伝達を促します。**③MAO-B 阻害薬（エフピー）**はドーパミンを分解する酵素（MAO-B という酵素）の働きを抑え、ドーパミンを長持ちさせることで作用を持続させます。**④ドーパミン受容体作動薬（ペルマックス、カバサール等）**は鍵と鍵穴の関係で例えると、ドーパミン受容体作動薬（鍵の部分）が神経細胞のドーパミン受容体（ドーパミンを受け取る鍵穴の部分）に結合して、ドーパミンと同じように神経の刺激を伝達するように働きます。

もう一つはアセチルコリンという物質の働きを抑える**抗コリン薬（アーテン）**という薬です。通常、ドーパミンが低下するとアセチルコリンの働きが活発になるといわれていますが、このアセチルコリンの働きを抑えドーパミンとのバランスを調整し、ドーパミンに本来の働きをさせるるようにする薬です。

これらの薬を長く継続して服用することによって症状を抑え、気長に上手に病気と付き合っていく必要があります。主治医の先生が患者様の症状に合わせて、治療を行っていきますので、症状が良くなったからといって、自分勝手に服用を中止したりしないよう注意してください。また、服用中に何か気になる症状が出たり、具合が悪くなるようなことがありましたら医師または薬剤師にご連絡ください。

（薬剤師　林　淳一郎）

【パーキンソン病と食事】

パーキンソン病は、同年齢の健康人と比較すると体重減少をきたしやすいと言われています。多くは様々な原因が関与していますが、それらには、嚥下・咀嚼障害、抗パーキンソン病薬の副作用、エネルギー消費量の増大、うつ状態による食欲低下などが含まれています。からだの栄養状態を適切に保つことは、健康な生活を送るために大切です。特別な食事メニューが必要なわけではありませんが、**食物繊維と水分**を十分含んだ**バランスのとれた食事（主食＋主菜＋野菜）**を心がけます。

咀嚼（噛む）に問題がある場合は、おかずを**一口サイズ**にしたり、**柔らかい食材**を使用します。汁物には澱粉やとろみ剤などで**とろみ**をつけたり、スプーン等を使用すると飲み込みやすくなります。

～食事づくりでのヒント～

①包丁を使うとき、堅い野菜は切りにくいので電子レンジなどで加熱してから切るようにすると便利です。

②スライサーを使った千切りや薄切り、皮むき器、フードプロセッサーによるみじん切りなど、安全に心がけながら道具を上手に使用してみましょう。

③調理をはじめる前に、必要な食材・調味料・器具を揃えておきましょう。

④食器はつけ置きしておき、汚れを落としやすいようにしましょう。

⑤買い物する事が困難であれば、食材の宅配サービスやホームヘルパーなどのサービスも上手に利用していきましょう。

（管理栄養士　西久保百合子）

くす通信

第７８号
2005年12月1日

パーキンソン病について
パーキンソン病に使用される薬
パーキンソン病と食事

くす（樟）は常緑の広葉樹で、熊本城内に多く見られます。種々の精油成分を含み、良い香りがします。樟脳をはじめ色々な薬用成分が抽出されるなど有用な薬用樹でもあります。また、くすし（薬師）とは、医師のことを指し、くすしぶみ（薬師書）は医術に関する書物のことを言います。本紙はこのくすにあやかり、健康な生活を送るために情報を提供します。

気楽に読んで健康を守りましょう。

診 療 時 間　8：30～17：00
（診療受付時間 8：30～11：00）

ただし、**急患はいつでも受診できます。**

（診療科目）**総合医療ｾﾝﾀｰ**［総合診療科、血液・膠原病内科、内分泌・代謝内科、腎臓内科（腎センター）、神経内科（脳神経センター）、呼吸器科（呼吸器センター）、］**心臓血管ｾﾝﾀｰ**（循環器科、心臓血管外科）、**消化器病ｾﾝﾀｰ**（消化器科）、精神科、神経科、小児科、外科、小児外科、整形外科、脳神経外科（脳神経センター）、皮膚科、形成外科、泌尿器科、産婦人科、**感覚器ｾﾝﾀｰ**（眼科、耳鼻咽喉科）、気管食道科、ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ科、**画像診断・治療ｾﾝﾀｰ**（放射線科）、麻酔科、歯科・口腔外科、**救命救急ｾﾝﾀｰ**、人間ﾄﾞｯｸ、脳ﾄﾞｯｸ

診療科の特色：神経内科

（神経内科医長　田北 智裕）

神経内科は、脳、脊髄、末梢神経、骨格筋が障害される疾患を扱っています。神経内科というと、少しイメージしにくい科かもしれませんが、もし、**運動障害**（筋力低下、不随意運動、など）、**感覚障害**（しびれ、感覚低下、など）、**歩行障害、頭痛、めまい、等**ありましたら当科を受診することをお勧めします。

具体的な疾患としては、当科で最も多く診療しているのは**脳梗塞**です。脳梗塞とは、動脈硬化や不整脈が原因で、脳の血管が閉塞して発症する病気です。脳組織が障害されるため、片麻痺や言語障害など様々な症状を呈します。

その他では、**脳炎**や**髄膜炎**などの中枢神経感染症、**パーキンソン病**や**多発性硬化症**などの神経難病、頭痛などの機能性疾患、等を診療しています。

【パーキンソン病とは】

パーキンソン病とは、脳内（中脳から基底核）のドパミンという神経伝達物質を含んだ細胞が変性するために、ドパミンが不足して発症する病気です。遺伝性もありますが、そのほとんど（約95%）が**孤発性**で、有病率は10万人に100人といわれますので、熊本市の人口を50万人とすると、およそ500人のパーキンソン病の患者様がいることになります。さらに50才以上では、100人に1人がパーキンソン病であるといわれています。発症年齢は、55～65才がピークです。

パーキンソン病に認められる症状、パーキンソニズムには、**振戦、筋強剛、無動、姿勢反射障害**といった代表的な四大症候があります。

振戦とは、手足が震えることですが、パーキンソン病では、力を抜いて安静な状態で震えるのが特徴です。

筋強剛とは、筋の緊張が亢進して上手く力が抜けない状態です。他動的に関節を動かすと抵抗を認めます。抵抗がカクカクッと間欠的なものを歯車様、一様なものを鉛管様と呼び、パーキンソン病の場合はほとんどが歯車様です。

無動とは、体の動きが非常に遅くなることです。

姿勢反射障害とは、バランスを崩したときにそれを立て直す反射が障害されることで、これにより転びやすくなります。

また、それ以外にも歩行が前かがみで歩幅が狭くなったり、歩き出すと急に止まれなかったり等の症状が認められます。

治療としては、神経細胞の変性自体を抑えるような根本的な治療は現在のところ確立されておらず、基本的には内服で不足したドパミンを補充する対症療法が主体です。また、内服薬の効果が不十分な場合は、脳深部の細胞を焼いたり電気刺激を与えたりすることで、ドパミンを含めたホルモンのバランスを整える手術を選択することもあります。

パーキンソン病自体の進行は遅く、基本的には平均寿命を全うすることのできる疾患です。適切な内服を確実に継続することによって、長く上手に付き合っていくことが非常に大切です。

（神経内科医長　田北　智裕）

国立病院機構熊本医療センター

（前 国立熊本病院）

NATIONAL HOSPITAL ORGANIZATION KUMAMOTO MEDICAL CENTER

〒860-0008　熊本市二の丸1-5
電話　096（353）6501（代表）
FAX　096（325）2519

ホームページ　http://www.hosp.go.jp/~knh